
トケナイマホウ

チェリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トケナイマホウ

【Nコード】

N4244G

【作者名】

チエリ

【あらすじ】

OLの綾音は会社帰りに妖精のファウを助け、お礼に願い事を一つだけ叶えてもらう事に。

その願いとは、同じ会社の営業部のスター・啓輔の恋人になる事。ファウは約束通り願いを叶えてくれたが……。

「うわああーっ！」

会社から自分のマンションに帰っている途中、

春の風に乗って桜の花びらが舞う中、微かに叫び声が聞こえた。

「？」

あたしは足を止めて周りを見回してみた。

しかし、特に変わった様子の人はいない。

(気のせいか……)

そして、再び歩き出そうとした時、

「助けて〜っ！」

また声が聞こえた。

しかも今度はもっと近くから声がする。

「ここだよーう」

弱々しい声。

(え、どこ?)

キョロキョロと今度はもっと目を凝らして見るけれど、

声の主が見つからない。

「もっと上見てー」

(……上?)

あたしは声の通りに上を見上げた。

すると、目の前の桜の木の枝に緑色をした半透明の

“何か”が付いていた。

(何これ？ 桜の葉……じゃない、よね？)

桜の花が満開のこの季節、葉が付くにはまだ早い。

だって他のどの桜の木を見ても葉っぱなんて一枚も付いていないし。

あたしは背伸びをして手を伸ばした。

4

「あっ！」

その時、また強い風が吹いてその緑色の“何か”が飛ばされそうになった。

あたしは慌てて両方の掌で包み込み、そっと枝から降ろした。

そして、ゆっくりと掌を開いて中を確認するとその“何かは”

ちよこんと座ったままあたしの顔を見上げていた。

(可愛い……っ)

あたしの掌の中にいたのは、小さな小さな緑色の小人だった。

絹糸のようなグリーンゴールドの髪、エメラルドみたいな透きとおった瞳、

桜色の頬と小さな唇。

背中には透明な薄い羽根ととても柔らかい生地のリボンを纏っている。

「ありがとう、君のおかげで助かったよー」

「あ、いえ……」

「あのおー、それで助けてくれたついでってワケじゃないんだけど……」

「？」

「……おなかすいちゃった」

小人さんは少し顔を赤くしながら言った。

(へ?)

「風に飛ばされないように一生懸命しがみついていたら

おなかですいてきちゃって……」

キュルルルルル……

小人さんのおなか鳴った。

すると、小人さんはますます顔を赤くして俯いた。

マンションに帰ったあたしはジャケットのポケットから
小人さんを出してハンドタオルの上に座らせてあげた。

「わあっ、あつたかあ〜い」

小人さんはタオルに包まって可愛らしい笑顔を浮かべた。

「そつえば、君の名前まだ聞いてなかったね」

「綾音」

「アヤネ？」

「うん、千秋綾音。小人さんは？」

「ボクは“小人”じゃなくて“妖精”、名前はファウ」

あたしが小人だと思っていた“何か”は“ファウ”と名乗り、
そして自分の事を“妖精”だと言った。

(妖精って……ホントにいるんだ?)

「ファウは男の子？」

「一応ね。女の子だと思ってた？」

「んー、どっちかなー? って……ところで、

ファウって普段どんなものを食べてるの?」

「基本的に何でも食べるよ」

（じゃあ、あたしと同じ物でいいのかな？）

「ファウはどうしてあんなトコにいたの？」

「んとね、風に乗って遊んでたら急に突風が吹き始めて

飛ばされたちゃったの」

「どこから来たの？」

「ここからずーと南にある『妖精の森』だよ」

「ふう〜ん」

「ねえ、アヤネは今、願い事ってある？」

「願い事？」

「うん、例えば欲しい物があるとか、叶えたい事があるとか」

「んー……」

欲しい物はこれとってないけれど、“叶えたい事”と言えば、
実は一つだけあったりする。

「なんでもいいよ？ 助けてくれたお礼にボクがアヤネの願いを
一つだけ叶えてあげる」

「……」

「なんか、ないの？」

「ある、けど……」

「何？」

「あの、ね、実はー……今、好きな人がいるの」

「じゃあ、その人の恋人になりたいんだ？」

「えっ」

「じゃあ、その人の事教えて？」

「んかね、あたしと同じ会社に勤めてる人で、

三上啓輔さんて言うの……、

でも、その人モテるし……駄目だよね？」

「ううん、全然御安い御用」

ファウはそう言うところりと笑った。

「……ファウ？」

翌朝、あたしが起きた時にはもうファウの姿はなかった。

ファウとあたしは昨夜、一緒のベッドで眠った。

「ファウ？」

（“妖精の森”に帰っちゃったのかな？）

「ファウ……」

もしかして、昨夜ファウと過ごしたあの時間は夢だったのかも……
そう思ったりもした。

しかし、ファウが包まっていたあのハンドタオルが枕元に残されていた。

「おはよう」

「……お、おはようございます」

ロッカールームを出て、自分の部署に向かうエレベーターの中、

“あの人”と一緒にあった。

三上啓輔さん

あたしが密かに憧れている人物で営業一課の“スター”、

……いや、社内の“スター”。

もっと言えば女子社員の憧れの的。

そんな人物と狭いエレベータの中で二人きり。

(心臓止まりそうっ)

「千秋さん」

「は、はいっ」

不意に名前を呼ばれ、あたしの体はビクリと跳ねた。

「そんなにびっくりしなくても……」

三上さんはククツと笑うと、

「今日の夜、空いてる？」

と、あたしの顔を覗き込んだ。

「は、はい……空いています、けど……」

「じゃあ、そのまま空けといて」

三上さんはそれだけ言うとエレベータを降りた。

「……」

エレベータが閉まって三上さんの姿が見えなくなっても

あたしは今の会話の意味がわからずにいた。

“じゃあ、そのまま空けといて”

(何……?)

彼とまともに話したのはこれが初めてだった。

心臓が早鐘を打っている。

名前を呼ばれたのだから……。

だけど、昼休みを過ぎても、定時を過ぎても

三上さんは何も言っ来なかった。

携帯はともかく社内のメールなら、全社員がやり取り出来る。

三上さんだってそんな事くらいは知っているはず。

「はあー……」

（何だったんだろ……？）

溜め息をつきながらロツカールームを出るともう午後7時を回っていた。

この時間はもう表の正面玄関は閉まっている。

照明もすでに落とされ、裏口に続く廊下の灯りが薄っすらと

誰もいない受付とロビーを映し出していた。

「千秋さん」

しかし、誰もいないと思っていたロビーから声が聞こえた。

「は、い………？」

あたしは思わず足を止め、薄暗いロビーから

近づいてくる人物に目を凝らした。

そして、その人物は……

「……っ！三上さん？」

「待ってたんだ」

三上さんだった。

「あたしを？」

「うん、言ったでしょ？ 今夜空けといてって」

「あ……、はい」

(言ったけど……何にも言っ
て来ないから、気が変わった
んだと思ってた)

「ゆっくり話したいんだ」

三上さんはそう言ってあたしを静かな落ち着いた雰囲気のお店に連れて来てくれた。

「千秋さんとこうして面と向かって話すのって、初めてだね」

「そう、ですね」

三上さんは至って余裕だ。

それに比べ、あたしは余裕なんてまったくない。

だって、入社してからずっと憧れていた人と

こうして二人きりであるなんて……まるで夢みたいだ。

（でも、なんであたし……？）

正直そう思った。

三上さんほどモテる人なら、一緒に食事をするくらいの方はたくさんいるだろう。

それとも……

他の人に飽きてそれで魔が差してあたしを誘ったとか？

（あ、きつとそうだった！）

「千秋さん……好きだ」

（……………え？）

「俺と付き合って？」

「……」

あたしは放心状態のまま、自分のマンションに帰った。

ベッドにダイブして目を閉じると三上さんの顔が浮かんできた。

“千秋さん……好きだ”

“俺と付き合って?”

あたしは思わず「はい」と答えてしまった。

それ以降の会話はまったく覚えていない。

「恋人になれてよかったね」

突然、どこからファウの声がした。

「っ！」

ベッドから起き上がるとファウは可愛らしい笑顔で

あたしの目の前をふわふわと飛んでいた。

「ファウ……ッ」

「これでアヤネの願い事が叶ったね」

「……」

（そっか……）

全部わかった。

どうして突然、三上さんがあたしなんか告白したのか。

「あれ？ あんまり嬉しそうじゃないね？」

ファウはあたしの顔を覗き込むように鼻先のあたりまで近づいて来た。

「ううん、そんな事ない。嬉しいよ」

「そお？ なら、よかった」

ファウはにっこり笑ってそう言つとあたしの目の前に舞い降りた。

「ファウ、今日はおなかすいてないの？」

「うん、さっきアヤネ達と一緒に食べたから」

「えっ!？」

「今日、ボク、ずっとアヤネの肩に乗ってたんだよ？」

「ウソ、全然わかんなかった……」

「だろうね、姿隠してたし」

ファウは悪戯っぽい顔でフフツツと笑った。

「そういえば、妖精って普通は姿見えないよね？」

「うん、普通はね。でも、態と姿を見せる時もあるよ」

「へえー、どんな時？」

「昨日みたいに風に飛ばされそうになって助けて欲しい時とか」

「あはは」

あたしは思わず吹き出した。

「でもね、ボク達妖精の姿はどんな人間にも見えるワケじゃないんだ」

「態と姿を見せてても？」

「うん、きれいな心を持つてる人間にしか見えないんだよ」

「きれいな心……」

「アヤネはボクの姿見えてるって事は、心がきれいなんだね」

ファウはそう言つとまた可愛らしく笑った。

……なんか照れちゃうな。

時を回って日付が変わった頃、携帯が鳴った。

短い着信音。

メールだ。

その音に驚き、ファウの体がピクンと跳ねた。

昨日と同じ様にハンドタオルに包まって

ウトウトしていたのだ。

「今の音なあに〜？」

ファウは目を擦りながら大きな欠伸をしてあたしの顔を見上げた。

「メールが来たの」

「お手紙？」

「うん、そう」

ファウにうんうんと返事をしながら携帯を開くと三上さんからだつた。

ちょっとびっくりした。

「あー、アヤネ赤くなってるうー」

すると、ファウがいつの間にかあたしの肩にちょこんと停まり、小さな指で頬をツンツンつついていた。

「え……そ、そんな事ないよ」

「でも彼氏からでしょ？」

“彼氏”

その言葉にまた照れて、更に赤くなるのが自分でもわかった。

「うん」

「彼氏、なんて？」

ファウはフフフと笑いながらまたハンドタオルの上に

ふわりと舞い降りた。

「ん、おやすみって」

三上さんにメールを返しながら答えると、ファウはうつ伏せになり、両肘をつけてその上に顎を乗せた。

そして両足をパタパタと動かしながらあたしの顔をにこにこしながら見つめていた。

「あ、ちよつとそこの君」

数日後、社内を歩いていると突然誰かに声を掛けられた。

「？」

あたしは周りを見回した。

しかし、廊下を歩いているのはあたしだけだ。

「君だよ、君」

そして目の前の応接室から出てきた男性社員があたしに近づいてきた。

（あたし……？）

「な、なんでしょっ？」

「その応接室にお茶持って来てくれる？」

うちの社員二人とお客様二人で四人分」

「え？」

「急いで頼むよ、よろしく」

男性社員は早口でそれだけ言うと応接室に戻った。

その男性社員は、つい先日三上さんと同じ営業一課に配属された
新入社員だった。

(まだ何もわからないんだから仕方ないか……)

コンコン……、

新人の男性社員に言われたとおり応接室にお茶を持って行く
中には三上さんも一緒にいた。

「……っ」

あたしと三上さんは一瞬だけ目が合った。

三上さんもお茶を持って来たのがあたしだからか、

驚いた顔をしている。

そして、二人とも慌てて目を逸らした。

「あ、ねえ、君」

午後、ミーティングルームでの打ち合わせが終わり、

自分の部署に戻ろうとしていると先程の新人社員にまた呼び止められた。

「？」

あたしが足を止めるとツカツカと近寄ってきて、

「この資料、纏めるの手伝ってくれない？」

20部ずつコピーして、ホッチキス」

と、いきなり山のような書類を突きつけられた。

(え……)

しかし、あたしにも急ぎの仕事があった。

「ごめんなさい、あたしこっちがあるから……」

暇な時ならともかく、今は他の部署の仕事を手伝う余裕なんてない。

すると、新人君は顔を顰めた。

「そっちは別に後回しにしたっていい仕事なんですよ？」

「こっちは今から会議で使う資料なんだよ」

「あの、あたしの方も急ぎの仕事だし……」

「おい、新人」

資料を押し付けられそうになって困っている

あたしと同じ課の浮田さんが助け船を出してくれた。

「おまえどこの部署だ？」

「営業一課ですけど」

「ふーん、名前は？」

「友川です」

「おまえの指導係は誰なんだ？」

「三上さんですけど……」

「わかった」

浮田さんは新人君にいくつか質問した後、

ミーティングルームを出ようと踵を上げた。

すると、そこへ三上さんが現れた。

「浮田さん、ミーティングルーム空きました？」

「あ、ちょうどいいところに来た。」

おい、友川によく言っとけ。

違う課の先輩に仕事頼むなって」

「え？」

三上さんはいきなり浮田さんに文句を言われ、キョトンとした。

「今朝は今朝でなんか千秋さんにお茶汲みさせてたみたいだし、
今だって千秋さんはこれから企画を纏めなきゃいけないのに

書類をコピーしろだのホッチキスしろだの……

他の部署を手伝うほど暇じゃねえんだよ」

浮田さんはそう言うと新人君を軽く睨んだ。

「……すみません。よく、言っておきます」

三上さんはそう言うと「友川、ちょっと……」と、

新人君を連れてミーティングルームを出て行った。

そして、午後8時過ぎ。

休憩室に行くと三上さんと、あの新入社員の友川君がいた。

(あ……)

「お疲れ様」

三上さんは柔らかい笑みをあたしに向けてくれた。

友川君はちょっとバツが悪そうな顔であたしに会釈をした。

「お、お疲れ様です」

「こんな遅くまで残業してたんだ？」

「はい、そう言う三上さん達も遅いですね？」

「うん……あ、今日はごめんね」

「？」

「……いや、うちの友川がさ」

あたしが何が？ という顔をすると三上さんは

目の前に座っている友川君を苦笑いしながら指差した。

「すみませんでしたっ」

すると、友川君は勢い良く立ち上がったかと思うと

あたしにぺこりと頭を下げた。

「僕、てつきり千秋さんの事、同じ新入社員の子だと思ってて……」

ホントッ、すみませんでしたっ」

「あー、いえ……」

「あのっ」

そして、その勢いのまま

「僕と付き合ってくださいっ!」

と、大声で言った。

(ええええええええええーっ!?)

翌朝、友川君から社内メールが来ていた。

なんて事はないただの“おはようメール”。

昨日、あれからあたしはずっと考えていた。

友川君から突然告白をされてからずっと……

“三上さんは本当にあたしの事好きなのかな？”

三上さんがあたしと付き合い方になったのは

それはきっとファウのおかげ。

……ファウが魔法をかけたから。

でも……

魔法が解けたらどうなるの？

それでも三上さんはあたしの事を好きだと言ってくれる？

友川君みたいに言ってくれるのかな……？

それから一ヶ月経っても、ファウが三上さんに向けた

魔法はまだ解けていなかった。

そして、友川君からも相変わらず毎朝“おはようメール”が届いて

いる。

ファウはというと、三上さんが告白してくれた夜以来、

あたしの前には姿を現さなくなった。

きっとあたしと三上さんが上手くいったと思って

“妖精の森”に帰ったのだろう。

でも、あたしは三上さんと“恋人”として会う度に

今にもファウの魔法が解けてしまいそうで、

そして、魔法が解けてしまった時、傷付くのが怖くなっていた。

「綾音、今夜俺の部屋に来ないか？」

週末、金曜日の夜。

三上さんと食事をした後、急にそんな事を言われた。

…?) (“俺の部屋に来ないか？”って、つまりー、そついでにコトよね…

「……」

「綾音？」

なかなか返事をしないあたしに三上さんは怪訝な顔をした。

「ごめんなさい……あたし……」

三上さんが部屋に呼んでくれたのはすごく嬉しかった。

でも……

もし、三上さんと一線を越えてしまったら、

ファウの魔法が解けたその時、あたしは立ち直れない気がした。

「……」

「……」

重苦しい沈黙の後、

「やっぱり、友川の事が気になるのか？」

三上さんは少し声を震わせた。

「あの時、友川に告白されても君はただ黙ってるだけだった。

それは、どうしてなんだ？

俺と付き合ってるのに、どうしてちゃんとはっきりあいつに

“付き合ってる人がいる”って言わなかったんだ？」

あの時……

友川君に告白された時、あたしはただ驚いて立ち尽くしているだけだった。

そして、その様子を見ていた三上さんが

「千秋さんにはちゃんと付き合ってる人がいるよ」

と、言ってくれたのだ。

友川君に「そうなの？」と、聞かれても黙って頷いただけ。

あたしの口からは友川君にハッキリ断っていない。

「友川の事が好きなのか？」

三上さんに顔を覗きこまれ、あたしは思わず視線を逸らした。

「綾音っ」

「ごめんなさい……あたし、やっぱり三上さんと

お付き合いできません……」

魔法が解けないうちに……

「綾音……」

さよならしたほうが……

「ごめんなさいっ」

傷付かなくて済む。

「一体どうやって自分の部屋に帰って来たのか記憶がない。

気がつくときあたしはベッドで泣いていた。

「アヤネ？」

(……ファウ?)

「どうしたの？何か悲しい事があったの？」

あたしが顔をあげると、とても心配そうな顔をしているファウがいた。

翌朝。

窓から差し込む日差しで目が覚めた。

鏡を見ると、あたしは酷い顔をしていた。

泣き腫らした目……

涙の後……

メイクも落とさず、しかも着替えないうまま寝てしまっていた。

昨夜、突然現れたファウにあたしは泣きながら三上さんの事を話した。

“三上さんの事はとっても好きだけど魔法が解けてしまった時が怖い……”

あたしがそう言うとファウは小さな手で何度も何度もあたしの頭を撫でてくれた。

「ファウ……？」

多分、またいないんだろうなと思いながら呼んでみた。

返事がない。

(やっぱり、いない……)

週明け、月曜日。

友川君からの“おはようメール”は今朝も届いていた。

彼はものすごい直球だ。

毎朝届くメールにあたしは返事を返すことはしていない。

それでもどうして彼はメールを送り続けてくるのか……？

(あたしもこんな風に三上さんに直球勝負出来てたら……)

「アヤネ」

なんとなくブーツと考えていると、どこかからファウの声が出た。

(気のせい……?)

だって、ここはあたしの部屋じゃなくて会社だ。

もし、ファウがいたとしてもこんな所で姿なんて見せないだろう。

「アヤネ」

しかし、今度はさっきよりもハッキリ聞こえた。

(え、どっ?)

あたしが周りを気にしながら目だけで捜していると、

「アヤネの肩にいるよ」と耳元で声が出た。

(肩?)

「姿は隠してるけどね」

(なあんだ、びっくりした)

「アヤネ、屋上に来て」

(屋上? 屋上に何かあるのかな?)

あたしは不思議に思いながら、ファウの言つとおり屋上に向かった。

屋上に出ると気持ちのいい風が吹いていた。

「綾音」

不意に名前を呼ばれ、あたしはその声にドキッとした。

「三上さん……」

(ぎょじつで、三上さんが「三上」?)

「……」

「……」

そして沈黙が続くこと約5分。

いや、本当はもっと短い時間なのかもしれない。

でも、あたしにはこの沈黙がやたら長く感じていた。

「あー、もう、じれったいなあっ」

沈黙を破るかのように聞こえてきた声と同時に

あたしと三上さんの目の前にファウが姿を現した。

「「ファウッ」「」

(……え？ 今、三上さんも“ファウ”って言った？)

あたしは驚き、思わず三上さんの顔を見上げた。

「み、三上さん、ファウの事、知ってるの？」

「綾音、ファウの事、知ってるの？」

あたしと三上さんは同時にそう言ひよ、

「え？」

「ん？」

と、顔を見合わせた。

そんなあたし達を他所に「もう、二人ともホント世話が焼けるなあ〜」

と、ファウは目の前をパタパタと飛んでいた。

(何？ 何？ どういう事ーっ!?)

「まったく、ケースもアヤネも同じ勘違いしてたなんて……」

「勘違い？」

「そ、勘違い。ボク、魔法なんて始めからかけてないよ？」

「えっ!？」

あたしはもう訳がわからない。

「ファウ……頼むから、わかるように説明してくれ」

さすがの三上さんもうやら頭が混乱しているらしい。

「この間、ケースケに助けて貰った次の日にね、

ボク、偶然アヤネにも助けて貰ったんだ。

それでね、助けて貰ったお礼に何か願い事を

一つ叶えてあげるって言ったたら、アヤネはね、

“ケースケの恋人になりたい”って言ったの」

「え……」

三上さんは驚いた表情であたしに視線を移した。

「ファウ、三上さんにも助けて貰った事があるの？」

「うん、アヤネに出会う前の日にね。それでねケースケに助けて貰ったお礼に何か願い事を一つ叶えてあげるって言ったなら、ケースケは“アヤネと恋人同士になりたい”って言ったの」

「え……うそ……」

「最初はケースケの願いを叶える為に風に乗ってアヤネの事捜してたんだけど、そのうち風が強くなってきて、飛ばされそうになってるところにちょうどアヤネが通りかかったってワケ。」

それで、アヤネの願いを聞いてみたらケースケの願いと一緒にだったから

魔法なんて最初っから使ってないんだよ。

それなのにアヤネは“魔法が解けた時、ケースケが

離れていってしまうのが怖い”とか言ってるし、

ケースケはケースケで“アヤネにかかっている魔法が解けたんだ”
とか言っつて、すっかり落ち込んでるし。

ボクが二人の願いを叶える為にしたのは、

ケースケがアヤネに告白するように仕向けただけ。

ケースケって意外と奥手だからなかなかアヤネに

言い出すキツカケを掴めなくてもう一年以上も

ずっと片想いしてたんだよ」

(それじゃあ……)

「そういう事だから、ちゃんと仲直りしてね？」

ファウはそう言つと、ふわりと風に乗ってあたし達の頭上まで舞い
上がった。

そして可愛らしい笑顔を浮かべながら「じゃ〜ね」と

手を振り、どこかへ飛んで行ってしまった。

「……」

「……」

残されたあたしと三上さんは無言で見つめ合い、

お互い勘違いしていた事が可笑しくて吹き出した。

「綾音、好きだよ」

「あたしも……三上さんが好きです」

「友川じゃなくて？」

「はい」

あたしが返事をすると、三上さんは柔らかい笑みを浮かべて
優しいキスをしてくれた。

「今、綾音に解けない魔法かけた」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4244g/>

トケナイマハウ

2010年11月30日17時05分発行